

Title	中山伊知郎監修・エコノミスト編集 日本経済の成長
Sub Title	
Author	佐藤, 保
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1961
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.54, No.1 (1961. 1) ,p.75(75)-
JaLC DOI	10.14991/001.19610101-0069
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19610101-0069">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19610101-0069</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

特色であろう。

本書をわれわれが読むときは、これが単なる法律学の書でないことが痛感せられる。社会法の根底にあり、その発展あるいは後退を促しているものが、実に産業であり、経済であり、社会問題であり、時代の大勢であった。わが国の戦前、戦中そして戦後と、社会経済の大いなる変動につれて、社会法学もまた目覚しく変転したが、ここに本書を手にして、あらためて経済と法律あるいは法律と経済の相互関連と、経済学および法律学の緊密なる協同的研究のいかに重要でありそして多大の成果を挙げえたかを知る。(有斐閣刊、H巻A5・三六二頁・五〇〇円、下巻A5・六五五頁・四五〇円)

—庭田範秋—

平林康之著

『戸坂 潤』

戸坂潤は日本の哲学が生んだ、最初のマルクス主義者であった。彼の前にも福本和夫

七四 (七四)

や、三木清のように、マルクス主義的な哲学者がいるにはいた。だが、福本の哲学は粗悪な輸入品であったし、三木の哲学はマルクス主義哲学を日本のアカデミー哲学の上で解釈したものにはすぎず、ともに過渡期の人たちであった。戸坂ははじめてマルクス主義の哲学を日本の哲学の言葉で理解した。彼の哲学は決して輸入品ではない。自分の頭脳で創造的に思索しようという哲学者の誇りがみちている。それは決して権威や教条のおうむ返しではない。と同時に、西田・田辺によって代表される日本のアカデミー哲学に対する徹底的な批判によって、それはまさにマルクス主義的である。したがって彼は、自分の言葉で創造的に考へるといふ意味においてマルクス主義哲学者であり、西田・田辺の観念論的アカデミー哲学をはっきり乗りこえたという意味において哲学的マルクス主義者であった。その戸坂潤に関して——彼は終戦直前にフアッシュの弾圧によって獄死した——いままでまとまった研究が一つもなかったのはむしろ不思議であるが、今度『近代日本の思想家』叢書の一つとして、彼に関する最初の単行研

究書が出たのはよろこばしい。この叢書では同じマルクシズムに関連するものとして、すでに宮川透氏による「三木清」、古田光氏による「河上肇」が出ている。よく整理され、しかも水準を保っている「三木清」論、啓蒙の線を狙いすぎて少しく水準を低めた「河上肇」論に比していえば、この「戸坂潤」論は、研究的ではあるが未整理・難解の感を免れない。その意味でこの本は戸坂研究の先駆の一つとなるであろう。大体戸坂の文章は難解ではあるが人をどきりとさせるある種の明快さをもっているのだが、この本を読んだ限りでは著者の引用のしかたや文章のむづかしさによって、哲学の難解さだけが目につき、読む人をはじき返しはしないかと心配である。とはいえ、従来は単に指摘されるだけであった空間論を媒介としての、戸坂の唯物論への道が、丹念にあとづけられているのは最大の収穫であろう。

この本を読んで感じることは、戸坂においては、哲学者マルクスが経済学者マルクスへと成長したその過程が確認されていないこと、哲学が、経済学によって媒介されること

なしに直接イデオロギー論に飛躍していること、更にいえば、経済学ぬきの階級意識論になっっていることである。さいごに、戸坂の創造的な思考の気魄を伝えるために、学問の自由に関する彼の発言をただ一つだけ引用しよう。「学問における自由——それこそ学問性である——は何か『強制の欠落状態』というようなものであるのではなくして、批判的気魄の存在であらねばならぬ。」(科学方法論)。戸坂潤ほどの意味からいっても過去の人ではないのである。(東京大学出版会・B6・二八八頁・三二〇円)

—野地洋行—

中山伊知郎監修  
エコノミスト編集

『日本経済の成長』

日本経済の成長は世界の驚異であり、これ迄の経済予測の殆んどがこれを過少評価の誤りに落ちこんでしまったのである。そしてなお現在においても、このような高い成長がそのまま続くことを危ぶむ人々が多いのであ

る。それにもかかわらず現実の日本経済はまたも予想を裏切る成長率を示したのである。おりから所得倍増計画の発表と共に、この日本経済の高い成長力はどこからでてくるのか、そして今後この高い成長力は持続しうるのか、という所謂成長力論争が盛んとなった。日本経済の成長率はそのまま生活水準に直接結びつく問題であり、その意味において人々の等しく関心をもつところであろう。本書はこの問題につき、エコノミストに連載された論争を更に割愛された部分を復元してまとめられたものである。大きく二つの部分に分けられ、解説1として、戦後日本の経済成長と題して宮崎勇氏が各種の統計資料を用いて、成長力の実態を述べられている。読者は改めて日本経済の驚くべき成長力を認識されることであろう。解説2としてこれ迄の成長力論争の要点ともいべきものがあげられている。そして第二部、シンポジウム、高度成長を支えるもの、において論争の内容が示される。出席者は、中山伊知郎氏を座長として、荒憲次郎、内田忠夫、大来佐武郎、小宮隆太郎、篠原三代平、下村治、都留重人、矢野智

雄、吉田義三、吉野俊彦の諸氏である。そして四つの主題につき、下村治、都留重人、矢野智雄、吉野俊彦の諸氏がそれぞれ報告され、それに対して各々討論が行なわれている。このうち一般的に最も興味あるのは、下村治氏の主題『日本経済は「歴史的勃興期」にあるか』であろう。というのは成長力論争は下村氏の論点に対する批判と反批判を中心としているからである。下村氏は人も知る成長力に関する超強気論者であり、現在の経済構造をもってすれば年率一〇%の成長は当然のことであり、将来この率が下がるとしても八%は充分可能であるとす。これに対して小宮、内田、吉田氏等がポトルネックの問題を論じ、篠原、大来、矢野氏等が所謂勃興期の意味を論じ、下村氏又これに答えている。学生諸君にとっても日本経済の現実を認識する上に役立つこと多いと思われる。(東京大学出版会発行・B6・二九五頁・三二〇円)

—佐藤 保—

新刊紹介

七五 (七五)